



報告 伊佐育子さんスピーキングツアー「東村高江は、今」 シリーズ 沖縄を知り、祈り、行動するために

10月28日から31日、日本カトリック正義と平和協議会は、東京都内、仙台市内の6つの団体の協力を得、沖縄県東村高江から伊佐育子さん（ヘリパッドいらない住民の会 那覇教区信徒）を招き、米軍北部訓練場ヘリパッド建設工事の状況についてのスピーキングツアーを行いました。初日28日は、私立東星学園高等学校（東京・清瀬市）にて、高校生みなさんを前にトークを行い、次のような内容が話されました。

沖縄本島北部には「やんばるの森」とよばれる豊かな自然の土地が広がっているが、1957

年、ここに米軍北部訓練場が作られ、その後ベトナム戦争の訓練地に使われたこと。北部訓練場に隣接する東村高江の人たちは、自然や自分たちの生活、4つのダムを守るため、そしてここに米国から送られてくる兵士たちを戦場に送らないために、長く基地に反対してきたこと。96年、米軍基地の整備縮小が日米両国間で取り決められたが、実際は新たな基地の増設にすぎず、高江集落のすぐそばに6つのヘリパッドが建設されることになったこと。そしてそれは実はヘリコプターではなくオスプレイの離発着帯であったこと。高江の人たちは座り込みの抵

抗を始めたが、国は座り込みを通行妨害として訴えたこと。オスプレイの配備後、独特の低周波音によって、多くの人が体の不調を訴えていること。そして、2016年7月10日の参議院選挙の翌日から、2年ぶりに工事が再開されたこと。それはつまり、選挙では、現職大臣を相手に10万票の差をつけて基地反対を主張する伊波洋一さんが当選し、県民の意思ははっきりと示されたのに、住民の願いは、結局、聞き入れられなかったということだった、ということ。トーク終了後、真剣で率直な感想や質問をたくさん受けました。10代の若い世代の言葉を、伊佐さんの回答とあわせて紹介します。

質問（2年生・男子）：東村の村長がヘリパッド工事を容認してしまったと伺ったのですが、どうしてそのようなことがあったのか、たいへん疑問に感じます。なぜなら沖縄は、ヤンバルクイナなどが生息する自然豊かなところと聞きました。それが、沖縄県民の支えになっていると思うのに、どうしてこのようなことになってしまったのか、知りたいのです。

伊佐さん：ありがとうございます、そうですね、どうして村長は私たちの生活を守ってくれなかったのだろうと、本当に悔しい思いです。村がこの基地を受け入れたら、迷惑料が入ってくるのです。この小さな村はとても財政が厳しく、高江のみなさんには悪いけれど、村政のために犠牲になってくださいというようなことを言われてしまいました。私たちがいくら反対を言っても、どうせきっと日米の大きな力でヘリパッドは作られてしまうよ、反対に協力する人が200人来ても、排除され、工事のダンプは入っていくよ、どうしたらいいんだ、これはもう無理ではないか、大きな力にこんな小さな村はかなわないよ、県の規模で辺野古反対を言っても、強引に工事が行われる、これはもう勝ち目がないのではないかと、そうすると、もう、もらっておくものはもらっておいたほうがいいのではないかと、どうせ基地は作られて、私たちはずっと



10月28日 東星学園高等学校（東京・清瀬市）にて

基地に苦しみられなければならないのなら、せめて何かに役立つお金をもらっておいたほうがいいではないか。これが、村長の容認の理由でした。

質問（2年生・女子）：低空飛行訓練をしたり、体に影響を及ぼしたり、絶滅危惧種が破壊されてしまうようなオスプレイに対して、村の方々は訴えたりしていると思うのですが、これに対して国は何かしますか？

伊佐さん：オスプレイ配備に関しては、2013年、オスプレイ配備をしないでくださいという建白書を政府に提出するために、県の全41市町村首長やその代表者が東京にやって来ました。しかし、政府はそれを無視してオスプレイを1日も遅らせずに配備したのです。ほかにもいろいろな反対運動をあちこちでしています。反対のための集会をして10万人も集まっているのです。私たちは日本政府に、戦後71年の間、米兵の少女暴行事件（1995年）があった時も、オスプレイが沖縄に最初に来た時（2012年）も、何度も何度も、いつもこうやって集会をして表明してきたのです。沖縄はこんなに言っているのに、どうして政府は言うことを聞いてくれないのだろうか、これは差別ではないかと、そんな発言まででています。どうして聞いてくれないのか、みなさんもぜひ考えてみてください。

質問（3年生・男子）：日本は地方と国とでは行政が違いますが、癒着もあるんだと思います。国民がこれを監視していかなければならないと

思います。地方自治と外交防衛の問題は兼ね合いがあると思うのですが、政府はしきりに外交と防衛が優先事項だと言っています。これが国民の利益にかなっているのかなと思います。これについてはどう思われますか。

伊佐さん：いろいろな裁判があって、これなら勝つだろうと思うことでも、国の事業というだけで負けてしまいます。沖縄では、裁判官は国のお抱えだと言われています。希望が持てない。司法と行政は分かれているはずなのに政治のいう通りになってしまいます。このあいだの辺野古の判決*も、裁判官は、国が提出した書類をそのまま読み上げたような判決をしているのです。沖縄県民はがっかりしています。私もヘリパッド建設をやめさせるために、「米軍ヘリパッド建設工事差し止め訴訟」を起こしています。これもどうなるかわかりませんが、このことを一人でも多くの人に知ってもらいたいです。裁判という方法があるのだから、裁判で頑張りたいという思いでやっています。本当に公正な、憲法に則った裁判をしてほしいと思っています。

私たちは今、国のために、国策のためにヘリパッドを受け入れなさいと言われてしています。そうしたら、私たち一人ひとりの人権はどうなるのでしょうか、私たちはここで平和に暮らしたい、子どもを守りたい、家庭を守りたい、その権利はどうなるの、と訴えています。今、本当に憲法が危ない状況です。日米安保条約に則って国の政策が決められ、国策だといって私たちは排除されています。これは高江だけのことはありません。みなさんのところでもいつか起きることです。高江で今起きていることは、これから辺野古でも起きるだろうし、みなさんのところでも、こんな事業はやめてほしい、とか、こんな国策はやめてほしいとか、戦争はしたくないと声を上げて、こうして力でねじ伏せられてしまうかもしれない。高江では、そのようなことが起きているのです。だから、沖縄のことだから、ではなくて、いずれ自分たちに起きるかもしれないことだと思って見てほしいのです。そして、こんなことは高江を最後にしてほしいと思っています。

こんな意見もありました！
東星学園高等学校のみなさんの感想から…

1年生・男子：正しいことをしているのになぜとりあってもらえないのか。国のやり方が汚くて、日本国民として少し残念です。自分たちがやられたら、ということを考えないんだらうなと思いました。機動隊をこんな風に使う必要が分らないです。米軍ではなく日本の組織がやっているところがおかしいと思います。アメリカのために。戦争しないと言っている国なのに戦争に加担している気がします。平和は作り上げるもの、という言葉に心を打たれました。

2年生・女子：兵隊にはなりたくてなったのではなくて、国のために自分の命をささげると言っただけで、私の知り合いの自衛隊の人が言っていたので、米兵も同じ気持ちなのではないか

と思います。わたしは日米ハーフ（ママ）だから、たまに、どう思っているのか聞かれます。

2年生・女子：生活に寄り添うことが一番で、その人たちの立場に立って考えることが大切なんだと思いました。そこに住む方々の実際のさまざまな生活環境がまったく配慮されていないのはおかしいと思いました。だから、自分は「知っているひと」から「知り、伝えるひと」になりたいと思いました。

1年生・男子：アメリカ軍は日本を守っている重要な役割の一つだと思います。しかしあまりに沖縄に集中していることが問題だと思います。各地に分散させていくべきだと思います。工事によって潤おう建築業の人々はどのような意見を持っているのか気になります。

質問（2年生・男子）：沖縄に駐留する米軍は、世界を守っているのだ、という考えはないのですか、ISとか、そういうところに行くわけですよ、それらから日本が守られていると考えることはないのですか？

質問（1年生・男子）：それに補足してもいいですか。同じ意見なのです。米軍は人殺しの練習をしているとおっしゃっていましたが、その言い方がはたして適切なのかどうか、問いたいのです。日本も、奇襲攻撃をしてアメリカに戦争を仕掛けたわけですから、そういう国がまた出てくるという可能性は否めないわけですし、沖縄にある基地が東アジア一帯の「危険」という言い方はいけないのかもしれないですが、国際調和を乱す勢力を牽制するのに一役買っているのも事実です。けっして、沖縄に基地を集中させて住民に被害が及ぶことがいいと言っているわけではないのですが、完全に米軍基地を否定するのはまちがっているのではないかなあという気がするのですが。

伊佐さん：沖縄は沖縄戦を体験して、武力では平和は来ないということを体験しました。アメリカがテロの報復と言って始めた戦争は、今だに収まることなく、続いています。日本も、先の戦争について隣国に謝っていないことがたくさんあります。憲法9条があることで隣国は収まっていますが、また憲法9条を潰して戦争をする国になったら、やはり、日本はあの戦争をまだ反省していなかったのか、ということになってしまいます。そういう面からも、この憲法を潰してはならないのです。

アメリカは2010年、「エアシーバトル構想」を発表しました。米中が戦争をしたら、地球が終わってしまうだろう、しかし沖縄以南で紛争くらいならいいだろう、というのが、この「エアシーバトル構想」でした。

「エアシーバトル構想」には、中国が沖縄の嘉手納基地を目指してミサイルをとばすことになったら、海兵隊が沖縄にいるのは戦略として



10月29日 カトリック麹町聖イグナチオ教会
(東京・千代田区)にて

おかしいので、グアムやオーストラリアに移転、あるいは本国に帰還するという、海兵隊の削減を含んでいました。日本政府はこれを沖縄の負担軽減だと言いました。ところが、グアムでこれに関係する建物を建設しているのは、実は大手建設業者（ゼネコン）なのです。戦闘機の離発着のためには那覇と嘉手納と辺野古が必要です。本国でなかなか訓練ができないオスプレイが、沖縄に配備されました。そして、沖縄の離島、宮古や与那国に自衛隊が配備されました。

尖閣諸島問題についても、今まで中国と日本の漁船は仲よくやっていました。しかし「エアシーバトル構想」が発表されてから、お金をもらってそこで暴れる漁師がやってきました。都知事も尖閣諸島の土地を買いました。そうやって、尖閣諸島がだんだん危険なところになっていく。沖縄の人も、中国が攻めてきたらどうするのかと心配になって、自衛隊を配備して欲しいと言っている。そして、今、アメリカが考えているのは、もう沖縄が壊滅状態になって、本土決戦ということになったら、アメリカはどこで出ていくか、ということです。アメリカの構想では、沖縄はもう、やられて住めない状態になっている、私たちは殺されているのです、壊滅状態になっているのです。そういう計画をアメリカは立てているのです。

だから、戦争は準備され、計画され、私たちが怖い怖いと言っている間に、軍備が強化されていくのです。それが戦争なのです。かつては尖閣諸島辺でも漁師さんたちはうまくやってい

たのに、今までそんな争いごとは一切なかったのに、「エアシーバトル構想」がはじまったから、こんな問題が起きたのです。

武力で平和になったところってあるのかなあ、どうして話し合いで解決できないのかなあ。沖縄には「ぬちどうたから（命こそ宝）」ということばがあるのです。

アメリカの海兵隊員のお母さんと、メールでやり取りをしたことがあります。お母さんは、友人の息子はイラクに送られたけど、自分の息子は沖縄に送られたと喜んで、この息子を沖縄にずっと置いて欲しいと祈ったというのです。しかし、沖縄ではレイプ事件が起こったり、そのときはちょうど、米兵による20歳の女の子の死体遺棄事件があったころでした。沖縄県民が米軍出て行けという運動をしていたころです。それで、とても沖縄の人に申し訳ないと、でも自分の息子は沖縄に置いて欲しいと願ったそうです。米国のある政治家が「地獄を見る前に天国を知る、それが沖縄なんだ」と言っていたそうです。沖縄はしっかりアメリカの戦争のなかに組み込まれているのだと言っていました。

私たちはアメリカの兵士たちにも戦場に行つて欲しくないのです。北部訓練場では、射撃的は丸ではなく、人の形をしています。そして、狙いは頭や心臓ではなく、足の付け根なのだそうです。そんなところに命中しても即死しないよと思うでしょう。でもそれが戦争なのです。内臓が出て、のたうちまわって、助けてくれと叫ぶことができる、そうすると、周りにいる兵隊たちが助けに来る、そうすると戦闘力が落ちる、それが狙いなのです。悲惨な兵隊を見て、怖くなって帰ってしまうかもしれない、そうやって戦闘力が落ちる。それが戦争なのです。だから、やはり沖縄は人殺しの訓練場だと思います。そして、ベトナム戦争に行った兵士は、屍体になって沖縄に帰ってきます。沖縄では屍体をきれいに洗って、バラバラになった手足を縫い合わせる、そういう仕事を沖縄県民がやっていました。兵隊として国を出て行くときは英雄扱いされて行くけれど、戦場では物扱いされ



10月30日 カトリック元寺小路教会（宮城・仙台市）にて

て死んでいく、そして沖縄できれいになって、家族の元に返される、そのときは、国旗に包まれて、英雄になるかもしれないけれど、本当の戦争の悲惨さを沖縄の人は知っているから、日本にもアメリカにも英雄はいないんだよと、私たちに教えてくれます。すべて、この戦争は誰かのお金儲けのためなのです。沖縄の人は知っています。今日本は、武器輸出三原則を防衛装備移転三原則に変え、軍事国になろうとしています。兵器を使ってお金を儲ける人がでてきてしまいました。日本が作った武器で他国の人が人を殺してしまう、そういうことが現に起ころうとしています。自衛隊が海外に派兵され、他の国の兵士を殺してしまうかもしれない。そのような途上にあると思っています。兵士だって戦場になど行きたくないと思います。誰かの犠牲で私たちが平和を享受するのは、正しいことなのかなと思うのです。

注：普天間飛行場の辺野古への移設計画をめぐり、国は、埋め立て工事の承認を取り消した沖縄県の翁長雄志知事を訴えた。これに対し福岡高裁那覇支部は、2016年9月16日、国の主張を認め、翁長知事が承認取り消しの撤回に応じないのは違法だとする判決を言い渡した。

抄訳 教会が福音の非暴力へと回心する道（後編）

ー韓国カトリック教会を中心にー

■ ハン・サンボン（韓国ドロシー・デイ霊性センターコーディネーター）

（承前）今後、従軍教区が「国家主義と軍事主義」を越えて本来の意味を持つためには、司祭は本当に軍人の身分で従軍司牧に従事しなければならないのか、再検討する必要がある。軍人は上長の命令に従わなければならないが、司祭は神の命令に従わなければならないからである。教会が「福音的非暴力」を主張するなら、司祭たちが国防省で軍事訓練を受けて任官され、国防部から給料を受け取り、軍服を着るという行為は、初期教会と同様、司祭の良心の自由を侵すことになるからである。

●軍事政権に同調した韓国教会

韓国教会は、国家主義によって武装した軍事政権に正しく抵抗しなかったという事実を反省しなければならない。

1961年、パク・チョンヒが5.16軍事クーデターを起こしたとき、韓国の教会は早々に軍事政権を支持した。その最も代表的な教区が大邱教区だった。大邱教区の『カトリック時報』（『カトリック新聞』の前身）は「軍事革命と反ポリシー：反共は、国土統一よりも重要である」という記事で、「この地が共産化されても統一されなければならないとか、共産党の陰謀を知りながらも、民主主義が充実するためには、メディアや集会の自由を与えなければならない、などということとは、本末転倒」（1961.5.28）と発表した。その後、韓国の教会は「再建国民運動カトリックソウル教区推進会議」を結成し、政府の施策に積極的に協力した。

『カトリック時報』は、1963年3月16日付の「政治体質改善の本来の意味－私たちは、転換期に立っている」という社説で「教会は現実の政治に直接関与することを極力避けており、教会の中で、特に公の場で政治に言及したり、たとえ私語でも、教会の中でそのようなことを発

したりするのは望ましくない」とし、「政治不干渉主義」を打ち出した。

大邱教区教区長が支持した政治家イ・ヒョサンは、1971年の第7代大統領選挙を控えて行われた民主共和党慶南支部年次大会で、「大統領になるべき人は、パク・チョンヒしかない」「軍勢力の支持を受けられなければクーデターが起こるという先例を、私たちはたくさん見ている。国の指導者は、軍部の支持を受ける者でなければならない」と述べた。

さらに大邱教区は、1980年に光州事件後成立したチョン・ドゥファン独裁政権にも友好的な態度を見せた。大邱教区は、数々の悪法を世に出したことで知られる第5共和国の国家保衛立法会議に神父を参加させた。その結果、放送局と報道機関が強制的に統廃合され、教区の所有する『毎日新聞』が唯一の大邱地方紙として残る特惠を享受した。

結局、第2次大戦後の解放後から5.16軍事クーデター直後まで、教会は日本植民地時代に「仕方なく親日」だったのだと自己弁護する教会から一步も進むことができなかったのである。

●福音的非暴力的に改心する道

1970年代以降の韓国の教会を見ると、教会が軍事的覇権主義と国家主義に、多くの部分で侵されてしまっていたことは事実である。確かに「福音的非暴力」の立場をとった教会も少なかった。とはいえ、あまりにも長い間、保守的政治集団が、国家主義と愛国心を口実に「政治的抵抗勢力」を弾圧し、分断国家であることを利用して既得権を維持するための反北反共イデオロギーを浸透させたために、国家暴力に対して、教会は信仰についてさえ明確な立場をとることができなかった。今こそ、韓国教会の殉教者たちがみな、国家暴力の犠牲者だったこと

を思い出さなければならない。

そこで最後に、韓国の教会が福音的非暴力へと回心する途上で、省察しておかなければならないいくつかのことを提案し、私の問題提起を終えたい。

- (1) イエス・キリストは、抽象的で漠然とした「私たちの罪」を許すために死んだのではなく、帝国と国家の反福音的勢力に最後まで「非暴力的に」抵抗し、「暴力に」犠牲となった方だったことを、伝えて行かなければならない。
- (2) 日本帝国主義と軍事政権に協力した恥ずべき過去を公に懺悔し、韓国民の前で許しを求めなければならない。また一方で、維新体制（1972-87 パク・チョンヒ独裁政権時代）下に行われたチ・ハクスン司教と詩人キム・ジハの釈放運動や、キム・デジュン氏解放運動に尽くした日本カトリック正義と平和協議会に感謝し、日本のカトリック教会の過去の歴史清算作業、平和憲法守護運動を知るべきだ。
- (3) 教会の中に温存する物質的成長イデオロギーを一日も早く克服しなければならない。2014年教皇フランシスコ訪韓当時、教皇は韓国教会の「繁栄」を認めながらも、「教会は貧しい人々が増えないように注意してください」と頼まれた。福音的忠実以外のすべてのものを相対化させる能力がなければ、私たちは再び「力の論理」に乗る危険性がある。力の論理によれば、教会は支配秩序と既得権勢力に同調し、間接的であっても貧しい人々への暴力に無感覚になる可能性は高い。
- (4) これに関連し、軍隊を「信者確保の黄金漁場」と公然と言う態度を変えなければならない。従軍司牧、この物質的成長に没頭する限り、「軍事文化を逆転させる」という福音的な態度を維持することはできないだろう。従軍司牧は国防総省の要求どおり



済州海軍基地ゲート前で今も続く基地反対運動

の「精神戦力強化」のためのものではなく、「神の民の霊的な世話」のためのものである。このため、司祭は、国防部から一定の自律性を得なければならず、そのために司祭が軍人の身分で服務する制度を見直すべきである。これと関連し、今なお済州島ではカンジョン海軍基地反対ミサが献げられている状況で、海軍基地が竣工されると、ただちに聖フランシスコを守護者とする「済州海軍聖堂」を作って従軍司祭を派遣した韓国従軍教区の態度を理解するのは難しい。

- (5) 最後に、政治－経済－軍事的帝国主義、国家主義に対抗する福音について省察しなければならない。最初の福音は、ローマ帝国の辺境の植民地で宣言され、カトリック教会は「貧しい人々を優先的に選択」して民衆のためにはっきりと党派性を示したのだ。しかし、宣言したまま、生きていない福音なら、貧しい人々にとってそれは、（福音ではなく）「凶音」（悪い知らせ）である。

（以上、2016年9月3日、第3回カンジョン平和会議於済州教区聖フランシスコ平和センター、翻訳：仏生綾子、一部編集：日本カトリック正義と平和協議会事務局）

新刊書紹介『今こそ原発の廃止を—日本のカトリック教会の問いかけ』 (2016年10月5日発行 カトリック中央協議会)

■ 光延一郎 (『今こそ原発の廃止を—日本のカトリック教会の問いかけ』 編纂委員会代表 イエズス会)

本書は、2011年11月8日に日本カトリック司教団が発表した「原発を いますぐに廃止することを呼びかけたい」とのメッセージを、事故から5年半がたった今、改めて受け止めるために編纂されました。司教団からは、2016年11月11日、本書に重なる内容で新たなメッセージも発表されました。福島第一原発事故以後、原発体制が、安全性、廃棄物処理、人々の健康、平和、コスト、倫理などの面から、もはや破綻していることは多くの人々に共有されているでしょう。しかしながらこの国では、事故原因の徹底究明、および政府や東電という加害者の責任追及はあいまいにされながら原発再稼動が目論まれ、これについてメディアも教育も相変わらず萎縮しているようです。それに対して本書は、原発問題を経済や政治からではなく、なにより福音的また倫理的な観点から考えるための材料を提供します。この視点こそ、今、必要なことでしょう。

原発は、いかに科学技術の体裁をとっていても、中心には、人間の欲望による闇の力がうごめいています。それは、国家権力が牛耳る閉鎖的利益共同体の経済論理と安全保障戦略と軍需産業の癒着という、政治、経済、科学、技術、企業、軍事を握る少数特権者による「暴力」を基としたシステムであり、だからこそ、国民意志の無視、情報隠ぺい、買収・分断など、民主主義とは相いれない状況が当然のように介在します。

こうした抑圧的なシステムが、イエス・キリストのいのちといつくしみの福音と相容れるはずはありません。原発は「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(創世記3・5)という原初の罪の反復そのものであり、その意味で信仰の問題です。人間がこの罪に踏み込み、神本来の場所を侵害するな

らば、社会全体を支える最後の歯止めも連鎖崩壊するでしょう。もろもろの原子を結合させていたエネルギーが、すべてを壊滅するものへと突如反転する核分裂は、アトモス(分けられないもの)の解体。福島第一原発事故は、地震国日本を震源地としながら、そうした世界文明の亀裂と陥没をもたらした出来事だったでしょう。教皇フランシスコは、回勅『ラウダート・シ』で、人間が健やかに発展していくためには「神との和解」「人間相互の和解」「人間と被造界との和解」が必要だと述べました。核エネルギーはこの三重の関係、そして私たちの自分自身との関係をもすべてを断ち切り、分解させます。それは同教皇による使徒的勧告『福音の喜び』で語られた反福音的グローバル化の渦につながっています。利益追求と力への依存が結ばれた巨大軍産複合体、秘密保護法などによる言葉と思考の自由の制限、テロと治安強化、社会全体の軍事化…。これらは、福島や沖縄からやがて日本全体に拡がっていきかねません。

私たちは、こうした恐怖・威嚇・虚構の力である核エネルギーを克服して、いのちを生かす本来の力を取り戻すべきでしょう。そのために、原発事故で失われた「人間」が回復されるように、被災者とともに考察を深め、情報を共有し、ネットワークをつなげていくべきでしょう。そして大量の電力よりも、人間に内在する資源、人々が力を合わせてよりよい未来をつくっていかうという意志と希望を持続可能なエネルギーとする「人間」の尊厳と権利に見合った社会の仕組みを再建していかねばなりません。正義と平和協議会「平和のための脱核部会」のネットワークなどを通して、まわりの人々、また隣国の人々とも連携を深めて、脱核の声をバチカンにまで届けたいものです。

報告 死刑廃止を求める部会 日弁連の「死刑廃止宣言」と信仰者の使命

弁護士の使命とは何でしょうか？ 弁護士法第1条には、「弁護士は、基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする」とあります。では、弁護士が擁護すべき「基本的人権」とは何でしょうか？

日本弁護士連合会（日弁連）は、2016年10月7日に福井市で開催した人権擁護大会において、「死刑制度の廃止を含む刑罰制度全体の改革を求める宣言」を採択しました。日弁連がここまで明確に「2020年までに死刑制度の廃止を目指す」と宣言したため、世間でも話題になりました。

日本社会の中には死刑廃止に懐疑的な人、さらには死刑制度存続を強く主張する人も決して少なくありません。弁護士の中にも死刑を支持する人がいるのも事実ですし、今回の採択をめぐっては日弁連の中でも多くの議論

があったようです。けれども基本的人権を擁護するのが弁護士の使命だとしたら、その擁護すべき「基本的人権」には、あらゆる人権の根本である「生きる権利」は含まれないのでしょうか？

現教皇フランシスコは折に触れ、死刑廃止を精力的に訴えています。それは「たとえ犯罪者であっても、神のたまものであるいのちを生きるという不可侵の権利をもっているからです」（2016年2月21日）。確かにカトリック教会の中にも、死刑については様々な考えが存在しています。けれども私たちは本当に、死刑によって人を殺さなければ正義を実現できないのでしょうか。私たち信仰者の使命とは何か、今一度考え直したいと思います。

（事務局・柳川朋毅）

報告 平和のための脱核部会

2016年10月15日と16日、平和のための脱核部会青森集会を開催しました。15日は、六ヶ所再処理工場を見学、大間原子力発電所工事現場の隣接地にログハウス「あさこハウス」を建て、そこで自家発電を行って生活し、まさに脱原発を生きる、小笠原厚子さんを訪ねました。大間原発工事は現在、ほぼ中断した状態ですが、もんじゅ停止後のプルトニウム消費施設として利用することを国は考えているようです。16日はカトリック八戸塩町教会にて、平賀徹夫仙台教区司教による主日ミサの後、今中哲二さん（京都大学原子炉実験所元助教）を講師に招き、核の技術がそもそも破綻しているということについて、大変丁寧に分かりやすくお話ししていただきました。



会場では、『今こそ原発の廃止を—日本のカトリック教会の問いかけ』（左ページ参照）を販売しました。（事務局・昼間範子）



正しい戦争ではなく、正しい平和を！

■ L・ゴーセンス（淳心会、松原教会主任司祭）

10月31日、ルターがカトリック教会の墮落を批判して、1517年に始まった宗教改革の記念行事がスウェーデンで行われ、教皇フランシスコが参加する。宗教改革の後、欧州各地で起きた宗教戦争は136年間にわたって続いた。これはキリスト教の歴史の汚点である。教皇ヨハネ・パウロ二世は、ミレニウム2000年にあたり、このことを公に謝罪し、許しを願った。第二ヴァティカン公会議の教会憲章には、「教会を常に改革しなければならない」というルターの言葉が書き入れられた。

宗教の場合、変革は回心と呼ばれ、偉大で絶対的な体験とされる。真の超越を体験することによって、自分自身を含むほかのすべてのものが相対化される。その上で、神の純粋な体験は、私たちを、低く排除された者、苦しむ平凡な人への奉仕へと必ず導く。そうすれば、行為の動機は抜本的に変わり、人生の目的は、安全、地位、妨害から、分かち合い、謙遜、協力へと変わっていく。

皆さん、こうした変革・回心が、今、教会で起ころうとしていることをご存知だろうか。2016年4月、教皇庁正義と平和評議会と国際的平和団体パクス・クリスティの主催で4日間のシンポジウムが、ローマで行われた。そこでは「正しい戦争」という理論を捨て、「正しい平和」を志向することへ変革するようにとの共同声明が発表された。

4世紀の聖アウグスティヌス以来、キリスト教は、条件が満たされれば戦争は許されずとずっと教えてきた。しかし残念ながら、多くの場合、この理論は戦争を防ぐどころか、戦争を正当化するために使われてきた。

「もう一つの戦争を始めることで戦争が終

わったことにはならない」のだ。たとえ独裁主義者の暴力があったとしても、戦争の暴力によってそれを止めることは無理で、むしろエスカレートさせるばかりであることは、今のイラク、リビア、シリアの状況から明らかになっている。

力・武力の権利を持つことなく、人権という力を持ってこそ、平和は作られるのだ。イエスが歩んだ非暴力の道を学び、山上の説教で教えているイエス自身の非暴力を実践しようという結論に、シンポジウムは達した。「正しい戦争はもうありえない、正しい平和を積極的に求めよう」と。

毎年元旦、教皇は世界平和のためのメッセージを宣言する。2017年のメッセージのタイトルは「非暴力ー平和実現のため政治のスタイル」とすでに決まっている。つまり、厳しい現実に対しては、抑止力ではなく、非暴力に基づいて、政治的な対策をはかるべきだ。武器の生産と商売に制限を掛け、紛争の地域への武器輸出にストップをかけて交渉を手伝うべきなのだ。

皆さん、これは理想にすぎず非現実的だと思いませんか。しかし振り返ってみてください。日本にも戦国時代があったけれど、名古屋市と京都市の間でそれぞれの機動隊が互いに戦って戦争することが、今、起こり得るだろうか。

やはり、人類は進歩してきたのだし、今でも進歩することができるはずだ。世界平和を祈りながら回心すれば、きっと。

（2016年10月10日 世田谷宗教者懇話会 第25回「世界平和を祈るつどい」にて発表）

Rorate…私から正義が始まりますように！

■ 朴庾美 パク・ユミ（フリーランサー）

“Rorate caeli de super, et nubes pluant iustum.”

「天よ、露を滴らせよ、雲よ正義を注げ（救いが実を結ぶように、恵みの御業が共に芽生えるように）」（イザヤ45：8）

ドイツでは伝統的に待降節の間、毎週一回ずつRorateミサを捧げます。イザヤ書の上記の節の最初の言葉を引用し、イエス様を胎内に宿す聖母マリアをほめたたえ、幼子イエスが来られるのを待つ、ロウソクのミサです。全ての灯りを消して、暗い世界のように真っ暗になった教会堂の中で、この暗闇に來られる光、キリストを表そうそくを一つずつつけていき、私たちのもとに來たる幼子イエス、光を見せてくださる母マリアのためにミサを捧げます。そのように、正義によって成し遂げられる真の平和といのちの光を待つ心を、育むのです。

自然をもっと近くに感じながら暮らした昔の先祖たちには、母の出産のように天が開かれて（正義の）露が滴り、雨が降り注ぎ、正義が芽生え、救いが咲くこと、それが私たちのもとに光が來られる救いの過程であるということが、象徴としてではなく、すぐに理解できるものでした。先祖たちは暗闇を照らす小さなろうそくの火一つに、光が近づき、より広く覆い照らしてくださる希望と信仰を見たことでしょう。

「お前から 平和が始まりますように!」は2014年に開いた済州島カンジョン平和会議の準備をするときに選んだテーマでした。「カンジョンよ、お前はこんなに小さな村だが、お前から国じゅうに平和が広がるように!」。これは、2007年以来、海軍基地建設工事に反対し、平和運動を繰り広げている韓国済州島カンジョン村で、チェジュ教区長のカン・ウイル司教様が、2012年、しあわせなおとめマリア誕生の祝日に、カンジョン

村をミカ預言書5章にたとえて言われた言葉です。この一節を歌った歌が、毎日、カンジョン村では響きわたっています。この一節から第一回カンジョン平和会議のテーマを決めました。ベツレヘムで灯された小さな光が全世界に及んだように、平和が粘り強くすみずみまで及ぶことへの信仰と希望を、平和会議のテーマに込めました。開発を前面に出す大企業の利益追及と、武力で葛藤を統治しようとする国家の巨大な力に立ち向かい、美しく豊かな自然を保存し、そこに生きる人々のいのちと暮らしを守るため、真の平和のための小さな動きが最後には勝利しますように! この信仰と希望を…

実際、カンジョン村は、ハルラ山から流れ落ちる水が小さい泉を作り、その泉がカンジョン川に流れ流れて、さらに広い海に繋がるところに位置しています。溶岩が海水に削られクロンビという平たい安山岩を作り、淡水が溜まり波を防いでくれ、淡水と海水が接する環境にはめずらしい生物種がたくさん生きていました。それは、美しい自然の宝庫であり、豊かな土壌をもつ地域でした。海中にはさまざまな海藻やサンゴ礁が育ち、魚類が育つユネスコ自然保護地域でもありました。

今この地に世界各地から非武装、非暴力、平和のために働く人々が集まり、出会い、互いの経験を共有し、それぞれの考え方を分かち合っています。非武装平和だけでなく、私たち一人一人が真の平和を成し遂げるため、非暴力の生活を身につける方法も探し分かち合っています。

待降節のように、Rorate…自然と人間が共に生きる真の平和と救いの小さなロウソクを灯して、まことの平和が始まるようにと動いています。

- 1 シリーズ 沖縄を知り、祈り、行動するために 第3回
伊佐育子さんスピーキングツアー 「東村高江は、今」
- 6 抄訳 教会が福音の非暴力へと回心する道(後編)
－ 韓国カトリック教会を中心に － ハン・サンボン
- 8 『今こそ原発の廃止を～日本のカトリック教会の問いかけ』
..... 光延一郎
- 9 報告 死刑廃止を求める部会
報告 平和のための脱核部会
- 10 正しい戦争ではなく、正しい平和を! L・ゴーセンス
- 11 連載 小さな泉が川となる バク・ユミ 朴庚美
- 12 まんが「ポストランテの石橋さん」

表紙写真 日韓脱核巡礼と懇談会(9月20日～23日)が、韓国司教協議会
生環境委員会と韓国創造保全連帯の共催で開かれ、日本からは平和のため
の脱核部会より14名が参加しました。写真は訪問先サムチョク市で二人の少年
から渡された、日韓脱原発親善の絵です。ハートの中には、「福島が好きです」
と書いてあります。



東京教区
正義と平和
委員会

辺野古・高江 基地建設反対すわりこみ応援団 (2016年10月3日～6日)

参加体験記

高江での体験を話すと、皆が一様に「この日本で、そんなことが起きているなんて信じられない」と言います。私自身、自分が体験していることが現実とは思えませんでした。このツアーでの体験を通して、今の沖縄の人々の苦しみは、今始まったことではないこと、これまで私が享受してきた日本の「平和」はこのような人々の苦しみの上に成り立っていたのだということを実感させられました。これまでは安全の象徴であった街角の警察官の存在が、今、まったく違ったものに見えます。笑顔で挨拶してくれる彼らも、私が国の方針に逆らうなら、高江で私の手足を掴んで運んだ機動隊員のように私に向かってくるのだ、と思わずにはいられません。沖縄で度々耳にした「今、沖縄で行われていることを止めなかったら、いずれ東京でも同じことが行われるようになる」という言葉が実現する日は、もうすぐそこに来ていると感じました。

(蓮沼玲子・愛徳カルメル会)

正義と平和 えとせとら...

各地
からの
報告

編集後記

政府は今日15日の閣議で、南スーダンに派遣される自衛隊の部隊に「駆け付け警護」の任務を付与することをついに決定した。政府は自衛隊の派遣を「国際貢献」といい、南スーダンは比較的安定しているから大丈夫だと言っている。国連の報告では安定などしていないのだから、そもそも詐欺なのだが、それにしても、政府のこの説明も転倒している。本来、紛争地で国際貢献するといったら、もはや自国の力では維持しきれなくなった治安を鎮静させ、和解をもたらすことだろう。安定しているから武器を担いで国際貢献しに行くとは、おかしいなはなしだ。武器を担いで海外に行く、という既成事実が重要で、南スーダンの安定など、二の次なのだ。

現地で働く日本人シスターからの報告では、ジュバの状況が最悪になった時、最後まで頼れ信じられるのは、武装した国連軍などではなく、丸腰で、地域で生きる教会であることを、現地の人々は知っており、だから、教会は最後の最後まで、逃げることはできないのだそうだ。シスターたちの活躍を、主よ、どうかお護りください。(h.)



発行日 2016年12月1日(隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,500円(送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>